

# 『浮世物語』の構成と「浮世房」の変身

中 嶋 隆

—

滑稽的人物から、一見唐突に教訓者に変身する『浮世物語』の主人公浮世房の造型に関して、分裂を見るか、あるいは一貫性を見出すかの対立的見解が存在する。前者の立場をとるのは、鈴木亨氏と谷脇理史氏である。鈴木氏は、浮世房の前半と後半の矛盾を認めつつ、ともかく「主人公の行動に伴う展開をこの作品は守り続けようとしている」と評された。谷脇氏は、浮世房の変質を、「批判の目的と笑を提供する目的」を総合化しようとする作者の意図の分解として把握され、この作品を「みじめな失敗作」と断ぜられる。

一方、「如水上瓢芦子」一着翻なる処生観」を軸に、浮世房の造型、全体の構成は首尾一貫しているとの見解をとられる前田金五郎氏<sup>(2)</sup>、浮世房はある意味では「神である以上、変転自在は決して不思議ではないのである」とされる野田寿雄氏<sup>(3)</sup>は、後者の立場に立たれる。また、浮世房を「変化する自在人物」「世俗を演ず

る視点人物」と性格づけられた水田潤氏と、「現実に対してただ通り過ぎていくだけのパッサンジャー」「仮装人物」と評された森耕一氏の見方にも、後者の立場が貫かれていよう<sup>(4)</sup>。

諸説は、主人公の変化を矛盾とみるか、前提とするかの相違に二分されるが、その根底には作品の長編的構成をどの程度認め得るかという、いわば読みの違いがひそんでいるようである。すなわち、鈴木氏は長編的構成の未成熟を、谷脇氏はその挫折を分析されたともいえるし、前田・野田両氏は、逆に構成の一貫を読みとられている。水田氏の論は、この作品を長編ではなく、「うき世はなしの断章の集積」とみる事によって成立している。また『浮世物語』は、自由な浮世遍歴と自由な政治社会批判を軸にした浮世の夢物語」であるとされる森氏は、作者の構成的意図を捨象しているといってもよい。

したがって、問題は、作者の構成意識の内実を、主人公の造型との関連においてどのように想定するかという点に集約されよう。本稿は、浮世房の造型に統一が認められる事、言い換えれば

『浮世物語』には了意の終始変わらぬ構成意識が読みとれる事、また主人公に一貫性をもたせようとする作者の意図は、浮世房が変身し得るという前提的設定にのみ見出せるのではなく、作品全体に貫流している事を、作品の読解を通じて論証しようとするものである。

二

さて、一般に『浮世物語』の構成は、浮世房が戯画化される前半と、教訓者に変質する後半とに、漠然と二分して理解されているようである。本稿では、作者・主人公・読者の位置関係から、序文的役割をもつ冒頭の「浮世といふ事」を除く全章を、次のように三分する立場をとる。

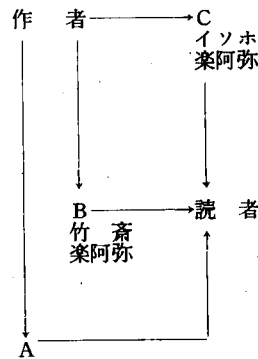
A 卷一の二から卷一の九（瓢太郎の誕生から出家するまで）

B 卷一の十から卷三の一（浮世房の諸国遍歴）

C 卷三の二から終章（浮世房が「御咄の衆」になり、「蛭仙」するまで）

このように分け、さらに作者・主人公・読者の位置を視野に入れる事により、作品構成上の浮世房の位置の変化が単純化されよう。また、「諸国遍歴中の失策は「竹齋」から、大名相手の諫言は『伊曾保物語』から」それぞれに学んできたと従来指摘されてきたこの作品の主人公と、イソホ（『伊曾保物語』竹齋（『竹齋』）、了意が造型した楽阿弥（『東海道名所記』）の三様の主人公とを、作者・主人公・読者の観点から比較すれば、浮世房の独自性が一層明らかになる。三者とABCの浮世房の関係を簡単に示せ

ば、図のようになる。



教訓・笑話の語り手として、作者と同様の高みから読者に語りかけているのは、卷三の二以降の浮世房である（図ではC）。Cの浮世房は、イソホと近似する。冒頭の章で「かうべへ、つねのかうべに、二つがさ有」と醜悪な外見が強調されるイソホの描写は、「甲瘡」をもった幼年期の瓢太郎を髣髴とさせる。しかし、イソホは同時に「されども、才覚又ならぶ人なし」と性格づけられる事によって、作品の冒頭から、作者と同じ高みに置かれ、才智あふれる言行をくりかえすのである。両者の相違は、イソホが「朽せぬ宝」（上巻第十七）である才智を手段に、自らの地位をそれに見合うものに高めていったのに対し、卷三の二以降の浮世房は、大名の「御咄の衆」に徹して出世につながる行為を放棄している点にある。

イソホと異なり、読者と同じレベルに位置する主人公は竹齋である。竹齋は、上巻の場面転換の書き出しに多用されている「又（さて）或（有）方（た）を見てあれば」の見る、という行為の主体とし

て、あるいは内裏女郎衆と墮落坊主の笑話的掛合を「立聞」したり、「かの謂を懸にうち聞」く主体となつて、読者の視点を代行しているといえる。また名古屋で療治に専念する竹齋も、単に笑話の対象として行為する人物にしかすぎない。例えば、銃屑のはいった眼の治療に成功した竹齋が偉そうに医書の解説をしても、「破れ紙子の体なれば、ごそめきまはる甲斐ぞ無き」と嘲弄されるだけなのである。

諸国修業の体裁がとられる巻一の十から巻三の一迄の浮世房（図ではB）は、この竹齋とほとんど同じ位置にある主人公である。米屋の前で長口舌をして米をせしめる（巻二の四）、代金をごまかすために餅に噎せたふりをする（巻二の八）等の浮世房の卑小な行為は、言うまでもなく、イソホと同じ高みにはなく、読者と共通の場の内での行為であらう。

BとCの浮世房の間を上下する主人公、言い換えれば、竹齋とイソホを包摂し、自在な視点を獲得しているのが、『東海道名所記』の楽阿弥である。楽阿弥は、「もとより鳩の戒のすりがらし房なれば」と、Bの浮世房と同じく「鳩の戒」の設定が与えられた主人公である。しかし、この作品を通じて読者と同じ視点をもつ人物は、むしろ楽阿弥と同行して聞き役にまわる大坂の手代と考へるべきであらう。この手代に対し、楽阿弥は、旅の心得を説き、ある場面では名所旧跡のまじめな案内者となる。「鳩の戒」の設定にもかかわらず、楽阿弥はイソホと等位置にあるといえよう。一方、一例をあげれば、「土山」で、彼は馬方と滑稽な禪問答をしたあげくに、「ゆゆしき法門をしすましたりと、楽阿弥は

自慢して、足は草臥たり、えじかり股になりて宿を通る」と描写されている。竹齋と同じように、楽阿弥が揶揄されるこのような場面も多数存在しているのである。

以上のように、楽阿弥はイソホの側面と竹齋の側面とを混交して持ち、「浮世房」には、両者の側面が、BとCにそれぞれ分化してあらわれているけれども、つまるところBCの浮世房は、了意がすでに造型した事のある楽阿弥とはほど重なりあう関係にあるといえる。したがって、了意にとって、浮世房造型の新しい試みは巻一の九までの瓢太郎（図ではA）の形象にあつたと考えなければならぬ。本稿では、主人公の変化を明確にするために、作品の流れとは逆に浮世房をとらえてきたが、『浮世物語』が一代記のスタイルをとる以上は、Aの瓢太郎の描き方いかんによって、BCの浮世房の変化の位相が異なつてこなければならぬであらう。いわば作者の構成意識を想定する鍵は、瓢太郎の造型とBCの浮世房との連関にあると言ってもよいのである。

### 三

巻一の二「浮世房なりたちの事」で、浮世房の父親は次のように描かれる。

父は、そんぢやうそこに奉公せし侍なりしが、百ぬらりの嘘つき、追従らしきへつらひ者なりければ、主君の氣にいらて、知行をとり出頭しけるほどに、余勢の音信物をとる事山のごとし。欲ふかく積みたたくはへて、金銀そのほか方に事欠く物なし。たま／＼軍の場にむかひける時、人なみに物の具

して、馬にかき乗せられて出でたれども、國中無双の憶病者おくびょうしやうにして、(略)人よりさきに逃げかへり、重ねて傍撃わがやぶにも交まられず、町人ちやうじんになり日頃取りたくはへたる金銀多ければ、うとく人うとくびとといはれて籠こもりゐたり。

ここでは、「嘘つき」「へつらひ者」「憶病者」ではあるが、武士として「出頭」し、町人になつても「うとく人」であつた父親、つまり申しむべき品性の持主ではあるけれども逆に世俗的成功をおさめた人物が造型されている。瓢太郎が「胎毒ふかき子」であるという記述に象徴されているように、父親の卑小な品性と、成功の裏にひそむ加害者の性格とは、瓢太郎に踏襲され、成長した瓢太郎(兵太郎——巻一の七八九)において顕在化するという構成が、Aでは一貫してとられることになる。

巻一の三「博奕の事」巻一の四「博奕異見の事」では、意見された瓢太郎が、逆説的な正論を方便に使つて、ばくちをやめようとなせず、巻一の五「傾城の事」巻一の六「傾城ぐるひ異見の事」では、うわべでは傾城狂いを止めると言っておきながら、ためらいなく約束を無視する瓢太郎が描かれるが、この四章において、内在した父親の性格が再生されるという了意の構成意識は失なわれていないと考えるべきであろう。巻一の三から巻一の六の四章では、常識やしつかつめらしい教訓などとは無縁に、瓢太郎が成人していくという筋立にそつて、故事来歴、教訓、笑話等の要素が、総合化されているのである。

次章「歩若党になりし事」で、遊女狂いの果に破産した瓢(兵)太郎は、大名の「御咄の衆」になる。為政者側になつて現実とか

かわりあおうとしたとたん、彼は、単なる遊人の域をこえ、父親がそうであつたように、人々から「片唾をのみて」のろわれる加害者に転化する。直接主人公の登場しない巻一の八「名馬の用に立たざる事」に了意の為政者批判を読みとる事は容易だが、作者のそのような批判意識の対象化された人間像が「ただ欲心をもととして、情も知らず道をもわきまへず、家中をも百姓をも、皆取りあぐる談合より外はなし」と描かれる兵太郎なのであつた。

この「親に似て大憶病の者」であつた彼は、「軍の場」から逃亡した父親と同様に、けんかの場から逃げ出し、「心もすすまぬ道心」をおこす(巻一の九「喧嘩して牢人しける事」)。巻一の二の書出し「今はむかし、浮世房とて、浮きに浮いて瓢金ひょうぎんなる法師ありけり」と、この章の末尾の「みづから浮世房とぞ付きにける」との呼応は、Aで、BCの浮世房の言動を制約する事になる生立を語ろうという、作者の明確な構成意識をうかがわせていよう。兵太郎と作者・読者の関係は、既に述べてきたイソホ・竹斎・楽阿弥の位置と相違している事は言うまでもない。兵太郎は、作者や読者の視点を代行するのではなく、単なる笑話の対象として描かれた主人公とも異なっている。彼は、巻一の「浮世といふ事」の処世観を受けた「一手先ひとても見えぬとびあがりの瓢金ひょうぎん」(巻一の三)であるという作品をつらぬく設定をうけながら、卑俗な品性と加害者の性格をもつた父親の再生として造型されたのである。滑稽的人物浮世房の放浪は、この独特な人間像をもつ兵太郎の、現実からの逃避という意味をもっていた。そして兵太郎の加害者の側面は、彼が行爲しうる場から脱落する事によつて

必然的に消失することになる。卷一の十以降の竹齋の人物への変貌は、決して唐突なものではなく、憶病ゆえに為政者側の人間としての資格を喪失した瓢太郎が、卑俗さを残存させながらとり得た唯一の選択であった。

各地を遍歴するBの浮世房が竹齋と重なりあう事は既に指摘してきたが、Aの瓢太郎から必然的に形象された主人公として、いわばこの擬似竹齋をとらえかえす時、Aの設定とBの浮世房とはいかなる関連をもっているのだろうか。前述のように、瓢太郎の出家が「心もすすまぬ」ものであった以上、浮世房は逃げ出さざるを得なかった過去の生に未練をもちつつ、諸国を遍歴することになる。裕福な医者になるという一応の目的をもって竹齋が遍歴したのとは異なり、父親ゆずりの卑小な品性の持主である浮世房の放浪は、生活の場から逃避する事のくりかえしであった。

卷一の十「浮世房京内まいりの事」で、若衆歌舞伎見物の客とけんかした浮世房は、「あらむつかしの出家や。身持もままならず、とかく房主はよからぬものなり。剃るまいものをくやくしくも剃り下しけるものかな」と出家した事を悔んでいる事に注意すべきであろう。彼は次章で「鳩の戒」になる事を決意するが、卷二の一「薬違ひをせし事」では医者になりそこね、卷二の二「大坂くんだり付大工異見物がたりの事」では大工になって大怪我をしたあげくに「ただもとの出家がましぢゃ」という述懐をもらしているのである。すなわち、この卷一の十から卷二の三迄の四章は、瓢太郎の卑劣な品性が「あれこれに成り替へ／＼嘘をつきて世を渡る」鳩の戒として実体化され、かつ出家という仮装的な職業が定

着する過程を示している章であると考えていいだろう。以降の浮世房には、少なくとも自分が坊主である事に懐疑的な言動はみられない。ここにおいてはじめて浮世房は、定着を志向する放浪者から、放浪のための放浪を繰り返す遍歴者に変質した事になる。

『東海道名所記』の桑阿弥は、浮世房と同じ「鳩の戒」ではあるが、浮世房のように世俗的な職業や地位を志向した事はない。浮世房は、加害者として生きた過去をもっていたからこそ、その放浪を定着させるためには、現実から脱落する過渡的な段階、すなわちこの四章が必要だったのである。

次章卷二の四「米の値段高き事付穀象虫の事」は、浮世房が米屋の前で米価の高騰を長々と批判するという内容をもつ。浮世房が現実批判を行なう事について、「作者の批判意識は生かしても、長編としての構想の破綻につながる」という谷脇氏の評がある。確かにこの章迄は、様々の教訓は浮世房（瓢太郎）に「異見」をする人物の口から語られていた。滑稽な人物が教訓を言うという矛盾は、鈴木氏の言われるように、まっとうな批判的態度を示す浮世房を、米一升与えてあしらう「米問屋の亭主の態度によって、たくみな調整」がなされていると考えられようが、それ以前に、浮世房が教訓を語る事自体に教訓のあり様を規定する前提がひそめられていると考えるべきであろう。既に見てきたように、放浪する「鳩の戒」に変質する前の浮世房は、のろわれるべき「御咄の衆」であった。その教訓は、悪政の荷担者であった彼が語る事自体において、既にその意味を失っているのである。では何故了意は、自らの批判意識を、そのような虚構を装って、開陳した

のであろうか。この点については、Cの浮世房と教訓の関係を考察した上で、後述することにする。

卷二の五から卷二の八の四章においては、浮世房の遍歴譚という枠組の中で、案内記的要素と笑話的要素とがそれぞれ軽重をもちながら、各章を構成している。教訓、談理的姿勢がみられない事に特徴があるが、作者の構成意識に変化を見出す事はできない。卑俗さを内在した浮世房が、笑話の主人公、案内記の視点人物として、竹斎・楽阿弥と重なりあっているのにすぎない。

卷二の九「後悔の事」は、浮世房が、戯画的人物から批判者へ「変質」することを正当化するための一章、「作者の用意」とする見解が従来とられているが、そのような作者の構成意図を、この章に見出す事には、無理があるように思う。何故なら、浮世房はここでは「そのかみ手習ひをせよといはれし物憂さ、博奕・傾城にたたきあげたる悔しさ、今はなか／＼その時がましでありける物をと、とび立つごとくに思はれつつ」と神妙に反省しているようだが、次章「人に癖ある事」には、「浮世房は遁世しけれども、なほ博奕・傾城狂ひの癖あり」と前章の後悔を否定した記述があるからである。これは、作者の構成意識の未熟さによるのではなく、浮世房の後悔がその場かぎりのもの、あるいは卷一の十で破産した浮世房が「むかしをくやむ心ありければ、都をば今日立ち出づる名残より君ゆゑ乗てし金の惜しさよ」と狂歌をよんだ時の後悔と同質のものと考えるべきであらう。浮世房は徐々に変化する「鳩の戒」であるという設定は、この章においても生きているのである。

むしろ、作品の構成を考える上で重要な章は、放浪する浮世房が大名の「御咄の衆」になるにいたる迄の過渡的章段になっている卷二の十一「賢人の事付狂泉を飲みし事」と卷三の一「宗旨を尋ぬる事」の両章であらう。卷二の十一は、浮世房が故事を多用しながら「賢なる者は世に落ちぶれて、へつらふ者は榮え行く」事の多い世間について、自分をからかった若侍相手に説教するという内容である。冒頭で、まず「今はむかし、浮世房こかしこまどひ歩きけるに」と、浮世房の放浪が強調されている。ついで彼は「えせ者にて、なぐさみがてら」に若侍の相手をすると言書かれ、「鳩の戒」としての性格（えせ者）と教訓を語る動機（なぐさみ）とが説明されている。つまり、浮世房は決してまじめな教訓者に変質したのではなく、でたために教訓する「鳩の戒」であるという設定が、くりかえされているのである。さらに浮世房自身も「御咄の衆」であった頃は「へつらひ者」であったのであるから、世に賢者は生きにくく、へつらい者が多いという教訓は、かつて現実とかかわった時の自分と反対の教訓を自ら述べている事になる。ここにも、卷二の四で米価の高騰を批判した浮世房と同じ構図がみられる。作者は、あえて教訓を一方的に主張する事を拒んでいるのである。「心あり顔に」に教訓を語り終えた浮世房は、「さそふ水あらばと思ひしに、よき事なり」と、いささか場あたり若侍達の招きに応じている。「御咄の衆」になるにいたるこの伏線を、浮世房の設定を反復した上で執筆した作者の意図を看過すべきではない。了意は兵太郎の卑俗な性格を「鳩の戒」として実体化したが、その浮世房の卑俗さは、「御咄の衆」にな

った後も継続するという前提が、この章で書かれていると考えざるをえないであらう。

次章で、浮世房は、主君と滑稽な問答をかわした後、その大名家の「御咄の衆」となる。浮世房の放浪が終わり、定着が開始されるのである。浮世房が、巻一の七で「御咄の衆」であった時には、前述のように「情も知らず道もわきまえ」ない人間として造型されたが、この章以後の浮世房は、人々にのろわれるような描き方はされていない。この変化は、主人公の変質や矛盾を意味するものではない。巻二の三で、現実にかかわる事を放棄した以上、兵太郎の加害者としての卑劣さは既に消失しているのである。つまり、Bの放浪が媒介になって、現実とかかわるAの「御咄の衆」から現実にかかわらないCの「御咄の衆」に変化する事が可能になったと考えるべきであらう。

以上のように、兵太郎の卑しさを内在した「鳩の戒」から「御咄の衆」（いわば、定着した鳩の戒）に浮世房を推移させるという作者の構成意識が認められるのならば、BからCへの浮世房の変化には、矛盾はないという事になる。けれども、巻三の二以降で彼が語る教訓のありかたは、変質してこざるをえないであらう。一見イソホと同位置におかれた浮世房の語る教訓・現実批判と、作者・読者の関係を、端的に示しているのが、巻三の二「侍の善悪批判の事」である。

この章は、出家の善悪を説いた家中の侍の言葉を受けた浮世房が、侍道の善悪を説教するという内容になっている。家中の侍は、浮世房に対し「御房の有様、何とやらん鼻の先うぞやき、身

のふるまひも瓢金さうに見ゆ。かまへて万事たしなみ給へ」と批判めいた発言をするが、浮世房は、自分が「世に捨てられたるあまり者」である事を否定し、「後世の大事さ」に出家したまうとな僧であると反論する。明らかに、彼は侍達をだましているのである。このように、この章で浮世房が自分の過去と現在を偽わっている事は、前述の巻二の十一で、「鳩の戒」のまま大名家にいざなわれるという設定がとられた事と呼応し、ここにも作者の一貫した構成意識を読みとる事ができる。

この章での浮世房は、一見イソホ的な高みから、教訓の語り手になっているように見えるが、Aの瓢太郎が、現実から脱落する事によって擬似竹斎に変身したのと同様、実は、それは、「鳩の戒」が「御咄の衆」になりすます事によって得られた偽装的な位置にすぎないのである。浮世房の教訓を聞いて納得する者もいれば、「あざける者」もいたという記述は、そのまま読者と教訓の関係にあてはまる。つまり、この章にみられるような、教訓の受容者いかにによって教訓の価値が変動するという意味での教訓の相対化は、教訓の内容が無意味化する事ではなく、言ってみれば読者に教訓的記述を認める者と否定する者がいてもよい事を、了意は認めているという事にならう。くりかえせば、浮世房は笑話・教訓の語り手に終始するが、読者は、この浮世房が語る教訓を、作者が絶対的に主張する教訓として受容する必要はないという関係が、作品の虚構的構成によって招来されているのである。

森氏は、巻三以降の浮世房が「ことばの人」に変身すると指摘されているが、この実体と言葉（教訓）の分離を可能にしたのは、

Aの瓢太郎から「鳩の戒」であるBの浮世房に、そして「御咄の衆」となった浮世房に引き継がれた卑屈さと、悪政に荷担する「御咄の衆」から脱落したという彼自身の経歴であった。言葉が浮世房という実体から解放される、すなわち浮世房が自らの言行に一切責任をもたない主人公であるからこそ、逆に教訓・批判が多様に展開できるのである。了意にとっては、このような虚構が、現実批判や教訓を表現する彼自身の主体的責任とは関係なく、自由に教訓・批判を発言できる事、つまりは了意自身から言葉が解放される事の保障になりえたのではないのだろうか。無論、了意がこのような教訓と虚構の関係を意識していたと考えるのは、深読みすぎるかもしれないが、少なくとも結果的には、『浮世物語』の一貫した構成が、そのように機能している事は疑いえない。

最終章を除く卷三の三以降の章のうち、教訓的要素の強い章は十七章（卷三の三・四・五・六・七・九・十・十四、卷四の一・三・五・六、卷五の一・二・四・五・六）におよび、残りの十一章は笑話的な章である。例えば、卷三の三「小謡を忘れたる事付武道ぶたしなみなる事」では、武道不鍛練な者の性情を、「軽薄」「追従」「胸欲」「嘘をつき」、大事の場になれば「人よりさきに逃げ」と列挙するが、これらは、Aでの瓢太郎の性情そのままであった。卷三の五「寛闊者」の批判、卷三の六の「ぬす人」の話から始まる「国賊」の批判等でも、批判を受けるべき浮世房が、自分を棚に上げた批判を行なっている。

卷三の十四、卷四の一の両章は、浮世房とは別な人間が登場

し、浮世房の語る批判を揶揄している章である。卷三の十四「浮世房主君の御子息異見の事」は、「ことの外の荒者」である主君の子息に浮世房が与えた教訓が、子息の無興をかうという内容。卷四の一「人にさま／＼の品ある事」では、後半より浮世房の、悪政・米商人批判が展開される。それを聞いていた「御咄の衆衆」が、「それは商人のとがにはあらず。その時分に生れあはせた世の人の福分うすぎ故なり」と、浮世房の批判を軽くあしらうという話である。両章とも、主君の子息や衆衆が浮世房に対峙する事によって、浮世房の現実批判の絶対性が喪失している。特に卷四の一は、前述した卷二の四で米商人が浮世房に米を与えてその現実批判を軽くあしらったのと同様のパターンがくりかえされている。この事からも、卷二と卷四の間の教訓のあり方に変化がない事、すなわち「鳩の戒」と「御咄の衆」とが異質ではない事がうかがわれよう。

卷三の七「雁鴨の稲をくらふ難儀の事」と卷三の九「鷹の爪引き開けたる事」においては、逆に、浮世房の教訓が主君の善政のたすけとなっている。しかし、この事は、今迄述べてきた浮世房の一貫した設定と矛盾してはいない。何故なら、卑しい性情の持主であるからこそ、何を言っても許される浮世房の偽装的教訓に対して、たまたま主君が「甘心」したとしても、浮世房にとってはその教訓を、衆衆や主君の子息に軽くあしらわれた教訓と同じ動機から述べたにすぎないのだから。浮世房を語り手としている以上は、それらは、あくまで偽装的教訓なのである。

笑話的要素の強い十一章のうち、浮世房の前身がかまであった事



が語られる巻四の八「浮世房過去の事をさとりし事」は、「つくばうて居る」ばかりの自分に對する浮世房の自嘲ととれる内容をもつ。「御咄の衆」になりすました浮世房が、決してイソホのうな、絶対的な高みから教訓する教訓者に変質していない事は、この章からもあきらかであろう。

以上のように、巻三の二以降の浮世房は、教訓を語り得る人間に実体的に変質したわけではなく、瓢太郎やBの浮世房と、まさに同一の主人公にすぎないのであった。

#### 四

これまで述べてきた事を整理する。

冒頭で三分した『浮世物語』の構成を、主人公の変化を中心にとらえかえせば、次のようにならう。

A 現実社会からの脱落（浮世房の生立）

B 「鳩の戒」の放浪

C 「御咄の衆」としての偽装・定着

そして、AからBへ移行するための過渡的な第四章（巻一の十から巻二の三）、BからCへ移行する際の三章（巻二の十一から巻三の二）の存在に注意すべきである。これらの七章には、瓢太郎から竹斎、竹斎からイソホへの外見的な主人公の変化が、実は偽装であるとする作者の意図が、集中的にあらわれている。瓢太郎は、父親から受けついだ性情（嘘つき・へつらひ者・欲ばり・憶病者）が実体的根拠となつて、また現実社会から脱落する事によつて、「瓢金なる法師」（巻一の二）「えせ者」（巻二の一）「瓢金のとび

あがり」（巻四の八）になりえたのである。したがって、放浪から定着へ変化したものの、「鳩の戒」も「御咄の衆」も瓢太郎の卑しい性情の実体化された姿にすぎなかった。

このような主人公を語り手にする教訓や現実批判は、必然的に、絶対的な価値を喪失せざるをえない。浮世房に對峙する人物が浮世房の教訓的言辭を擲擻している章（例えば、巻三の四、巻三の十四、巻四の一等）もあるが、卑しさを本質とする浮世房が、教訓を述べる事自体に、その原因があるのである。

前述したように、教訓を語る浮世房が、教訓内容に責任をもたない主人公である事は、逆に現実批判や教訓が自由に展開できる事の根拠になる。作者が、直接、教訓を述べるスタイルをとる『堪忍記』の跋文で、了意は次のように語っている。

この記を書を見て。わが妻わらひていはく。物かゝぬとてわか子を叱る親の無筆なる様に。堪忍記をしるす人に。何の堪忍したる事やある。わか身おこなはずハ。その詮あるまじといふ。我こたへて云く。この記をしるさんとて日比まづ。我身堪忍つよくする事。数々なり。（略）妻聞てそれハ貧乏ひとつよりおこりて。数々の堪忍いたすや。まことによき堪忍共かな。<sup>(16)</sup>

ここには、表現内容と表現主体の分裂を意識している了意の姿がある。現実批判を実行する手段のない了意が、自由に教訓や批判を表現するには、卑俗な主人公が無責任に語る教訓の形をとる事が好都合だったのである。了意の「知識の無力さの自覚」<sup>(17)</sup>は、浮世房の形象に直接反映しているのでなく、むしろ現実批判が

作者の絶對的な主張となりえない虚構を、了意が創造した事にこそ、あらわれているように思う。

主人公の行動において長編性を分析する観点に立てば、卷三の二以降の浮世房は、作品の構成の分裂を示すものになるが、語り手としての浮世房の設定は、主人公を、脱落・放浪・定着させるという作者の構成意識の必然的な帰着であった。了意は、仮名草子の諸要素を、主人公の行為に収斂させようと思図したのでなく、諸要素を総合化する広がりをも、主人公に求めたのである。

了意の現実批判や常識的教訓は、水田氏の指摘されるように、當時においては「文芸的要素」を構成していたと考えられよう。<sup>(18)</sup> 教訓も含む多様な「文芸的要素」を、多様な相において読者に示す事が、当時の仮名草子作者に求められていた資質であった。一貫した設定をもちつつ、イソホ・竹斎、あるいは楽阿弥と、啓蒙的作家と読者との間の縦軸のあらゆる位置に擬似的に変化する浮世房は、諸要素を多様に包摂する点では、効果的主人公だったのである。

注(1) 鈴木亨氏、仮名草子における教訓性と文芸性——「浮世物語」の構成をめぐる——(島根大学論集第11号) 浮世房型人間像の成立(島根大学法文学部紀要文学科編第2号) 谷協理史氏、「浮世物語」の論理と構成(『西鶴研究序説』所収)

(2) 「浮世物語」雑考(国語国文第34卷6号)

(3) 「浮世物語」覚書(国語国文研究第24号)

(4) 水田潤氏、『うき世物語』の構図(『仮名草子の世界』所収) 森耕一氏、『浮世物語』の可能性——浮世房一代記の意味——(近世文芸研究と評論第15号)

(5) 重友毅氏『日本近世文学史』

(6) 『東海道名所記』は万治二年成立説(岸得藏氏、『東海道名所記』の成立年代、『改訂浅井了意』所収)、『浮世物語』の成立時期については、前田金五郎氏の寛文四年以降の執筆とされる説(注2)に従い、楽阿弥は浮世房以前に造型されていたと考える。

(7) 以下の引用は、万治二年刊版本を翻字した『仮名草子集』第三卷による。

(8) 以下の引用は『古典文学大系仮名草子集』による。

(9) 以下の引用は『古典全書仮名草子集』下による。

(10) 以下の引用は『古典文学全集仮名草子浮世草子集』による。

(11) 注10の頭注

(12) 鈴木氏前掲(注1)論文

(13) 注10の頭注

(14) 注12と同じ。

(15) 注4前掲論文

(16) 引用は、小川武彦氏の翻刻による。(跡見学園女子大学文学科報第十号)

(17) 松田修氏、『浮世物語』の挫折(『日本近世文学の成立』所収)

(18) 注4前掲論文